

【書評】

DOBASHI Yoshimi

Penriuk et sa douleur : Ossements aïnoues retenus prisonniers

Traduit par Etienne LEHOUX-JOBIN, Presses de l'Université
du Québec, 2023

土橋芳美著

『痛みのペンリウク——囚われのアイヌ人骨』

草風館、2017年

小倉和子

OGURA Kazuko

本書はアイヌの作家、土橋芳美が2017年に発表した叙事詩『痛みのペンリウク——囚われのアイヌ人骨』の仏訳である。タイトルにもある（平村）ペンリウク（1832-1903）は土橋の曾祖父の兄にあたり、長らく北海道日高の平取村^{コタン}の首長を務めた人である。生前の1879年には、アイヌ民族の支援に生涯を捧げた若き聖公会宣教師ジョン・バチラー（1854-1944）がアイヌ語を学ぶために彼の家に何カ月も投宿している。その前年にはイギリス人旅行・探検家のイザベラ・バードもこの地を訪れ、『日本奥地紀行』に詳細な記録を残している。

1903年、ペンリウクが亡くなると村の墓地に埋葬されるが、その30年後、墓が掘り返され、彼の遺骨は「ピラトリ1号」と番号をふられて他の1000体余りの遺骨とともに北海道大学医学部に研究用の「標本」として保管される。この著しい人権侵害に対して遺族が立ち上がり、粘り強い抗議の末に遺骨が返還されることになった。2016年、インターネットでそのことを知った土橋も交渉を始め、遺骨との対面を果たすが、返還直前になって「ピラトリ1号」がペンリウクの遺骨かどうか特定できなくなったとの理由で返還を拒まれる。落胆し、泣いてばかりいる土橋の夢のなかにペンリウクの声が聞こえてくる。それを書きとったのが本書である。「芳美よ／泣くな（Chère Yoshimi / ne pleure pas）」というフレーズが笈のように聞こえてくる詩のなかで、墓を掘り返されて安住できないペンリウクの声が、ときに怒りをあらわにし、ときに曾孫の悲しみをなぐさめるかのように続いていく…。

評者がこの作品に出会ったのは2019年初めだった。少し前の研究休暇中にモンレアルでケベック大学モンレアル校のダニエル・シャルティエ教授と会う機会があった。北方研究を専門とする彼は、北方想像界国際研究所の所長もしていて、北米、グリーンランド、スカンディナヴィア半島、ロシアなどの先住民どうしのネットワーク作りを精力的に進めている。彼から、そのほとんどがケベック州北部に（一部はラブラドル地方にも）居住している先住民族であるイヌーの作家のことを聞き、ナオミ・フォンテーヌ (Naomi Fontaine, 1987-) やジョゼフィーヌ・バコン (Joséphine Bacon, 1947-) の作品を読み進めるうちに日本の先住民の状況が気になりだし、アイヌ関連の書籍を読み始めたときに土橋のこの本に出会い、強い衝撃を受けた。

シャルティエ教授が2019年4月に初来日して北海道大学で講演を行ったときには評者も同行した。講演会の主催者でアイヌ研究者のジェフリー・ゲーマン北大教授や、同大でフランス語教員を務めながらアイヌ文化研究を続けていたリュシアン＝ロラン・クレルク氏らと話すなかで、アイヌの作品でケベックの読者のために仏訳するとしたら何がよいかという話になった。そのときゲーマン教授が挙げたのが土橋のこの本で、評者もすかさず賛同した。しかし、いったい誰に翻訳してもらおうか？ シャルティエ教授から相談を受けて白羽の矢を立てたのが、エティエンヌ・ローウ＝ジョバンだった。本学会の会員でもある彼は、本稿を執筆している現在、モンレアル大学に提出する翻訳学の博士論文を準備中だが、日本語が堪能で、この講演からまもなく日本の文部科学省の国費留学生として立教大学文学研究科に留学することになっていた。来日してしばらく経ち、さあ翻訳にとりかかろうという矢先にコロナ禍が始まり、出版を予定していたケベック大学出版局の業務も滞りがちになった。それから丸3年、ようやく今回、仏訳が日の目を見ることになった。ただし、その3年間はけっして無駄だったわけではなく、その間に、原著者の意向もあって、原書には収められていなかったもう1つの作品「ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ」(土橋, 2019) も収録され、さらに、序文やアイヌ関連の年表・文献一覧なども加わり、ある意味では原書以上に充実した、フランス語圏読者向けのあたらしい書籍になったともいえる。そればかりか、本書もその一部を成しているケベック大学出版局の〈霧水の庭 (Jardin de givre)〉叢書からは、今回もう1冊、貫塩喜蔵 (1908-1985) というアイヌ人作家のマニフェスト的な作品『アイヌの同化と先蹤』(1934年) の仏訳 (Nukishio, 2023) も刊行された。2冊が同時出版されることによる相

乗効果で、ケベックと日本の先住民のあいだの対話が一気に進むことが期待される。

実際、アイヌも、イヌイットも、イヌーもすべて「人間」を意味する名称であり、今から数万年前、氷河期の最後の時期に北米大陸まで移動したといわれる民族とアイヌが同じルーツを持っていることがうかがえる。長い年月のなかでそれぞれの土地に順応しながら築いてきた文化は互いに異なるとはいえ、やはり共通点も多く、交流を深める価値は大いにあるだろう。たとえば、イヌーも含めたカナダに住む北米先住民たちが白人社会への「同化」を強いられ、そのために19世紀から20世紀にかけて15万人以上の子供たちが親から引き離されて寄宿学校に入れられたこと、2021年、ブリティッシュコロンビア州やサスカチュワン州の学校跡地から大量の遺骨が見つかり、寄宿学校での虐待の実態が明るみに出て、2022年にはローマ教皇みずから謝罪に訪れたことは記憶に新しい。アイヌもまた、明治政府によって彼らのアイヌモシリ（人間の大地）を奪われ、伝統的なサケ漁やシカ猟も禁止されて、あらたにあてがわれた地味のやせた土地を開拓して農耕民になることを強いられた。彼らは北海道旧土人保護法（1899年）で日本国民に編入させられたが、「同化」は当然、言葉にまで及ぶ。北米先住民の子どもたちは寄宿学校で英語やフランス語での生活を強いられたことにより母語を忘れ、休暇で家に戻っても、親との意思疎通が難しくなった。アイヌもまた、豊かな口承文学をもっていたが、書き言葉をもたなかったため、言葉の消滅は継承してきた文化の消滅に等しかった。

作品のなかでペンリウクは次のように語っている。「その昔／アイヌ語ではなく／日本語を覚えよと／役人たちが言ってきたとき／イギリス人の／パチラーが／『言葉を失ってはなりません』／と熱く語ってくれたことを思い出す」（土橋、2017、pp.75-76）。これは、外圧に屈せず、細々とながら自民族の言葉を守りぬいたアイヌたちが、北大から返還された遺骨を再埋葬するためにイチャルパ（先祖供養）を行い、そこでアイヌ語が高らかに響いているのを聞いて感動した、とペンリウクが芳美に伝えている一節に続く部分である。

しかし、ペンリウクを含めて、まだ返還に至っていない遺骨は「アイヌ納骨堂」とは名ばかりの北大の「標本保存庫」に囚われたままだ。彼らの霊は「自分の骨の行方を案じて／あの世にもいけず／宙に浮いておる（*également inquiets du sort de leurs propres os / ne pouvant rejoindre l'au-delà / flottent dans les*

airs.)」(土橋、2017、pp.100-101; Dobashi, 2023, p.115)。原生林を思わせる大木が点在している北大のキャンパスはさながら昔のアイヌコタンのようで、八雲、帯広、釧路、阿寒、千歳、浦幌、静内、網走、平取、樺太など各地から集まった1000余りのアイヌの霊体が深夜にカムイノミ(神への祈りの儀式)を繰り返して、手足のない頭蓋骨だけでぞろぞろと小川をめざして行進する様子は、悲壯感を越えてユーモラスにさえ感じられる。

一方、仏訳版にあらたに付け加えられた「ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ」(土橋、2019)は、ペンリウクが遺骨となってから、北大の「納骨堂」で樺太のコタンの首長だったハセランケの息子バフンケ(1855-1920)と再会し、真夜中に対話し、ペウタンケ(危急を知らせる叫び声)を挙げる詩である。バフンケは言う。「ペンリウクよ／わたしは／死んで／たった十六年で／墓を掘り返された／一九三六年のことだ／その遺骨には／まだ肉片が／付いていただろうよ／それを／どうしたのか／大鍋に入れて／煮はがしたか／おぞましい／おぞましいかぎりよ (Penriuk ! / Moi / seulement seize ans / après ma mort / on a rouvert ma tombe. / C'était en 1936. / Autour des os / j'avais certainement encore / de la chair ! / Alors / qu'ont-ils fait ? / Ils m'ont mis dans un grand chaudron / pour débarrasser mes os de leur chair ? / C'est d'une horreur / d'une horreur parmi les pires qui soient !)」(土橋、2019、pp.5-6; Dobashi, 2023, p.143)

ペンリウクは生前、まだ幼かったバフンケに1度だけ会ったことがあるのだが、その彼に「納骨堂」で再会することになるとは、なんとも皮肉なことである。

このほか、仏訳版には、先祖の土地の接収や言葉の消滅といった地球上の多くの先住民族に共通する経験を指摘し、土橋とバコンの対話の実現を期待するシャルティエ教授による「紹介」や、アイヌ民族、ペンリウク、北大によるアイヌの遺骨に関する学術調査、アイヌ文学の発展、仏訳版の構成などについて詳述したゲーマン教授による「序文」が加わり、また、巻末には、クレルク氏による更新世から現在までの、なんと65頁以上にのぼる年表とアイヌ関連のフランス語文獻一覧が添えられて、充実した内容になっている。

前述のように、翻訳者のローウ＝ジョバンはプロの翻訳者の資格も有する翻訳学研究者だが、詩の翻訳、とりわけペンリウクのような老人の口語調の言葉の翻訳には、学術論文やジャーナリスティックな文章の翻訳とは異なる苦労があったにちがいない。行分けされて書かれた詩の一文をフランス語でどのように配置すれば理解しやすく、詩的抒情を損なわない訳文になるかと

いった、日本語とフランス語という統語論的にも文化的にも隔たりの大きい言語どうしの翻訳ならではの難しさがあったと思う。ローウ＝ジョバンは原書から受ける感動を損なうことなく見事にフランス語に訳してくれた。本書がケベックの多くの読者に届き、日ケ交流が先住民族どうしにまで拡大するだけでなく、広くフランス語圏に読者を獲得することによって人間の尊厳について真摯に考える人々をつなぐ役割を担うことを願っている。

最後に、原書刊行時点で北海道大学の「納骨堂」に保存されていた遺骨は、2020年に白老にオープンしたウポポイ（民族共生象徴空間）に隣接する慰霊施設に移転され、遺族たちが何時でも訪れることのできる場所になったことを申し添えたい。

（おぐら かずこ 立教大学）

参考文献

土橋芳美 (2017) 『痛みのペンリウク——囚われのアイヌ人骨』草風館。

土橋芳美 (2019) 「ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ」『POLE』第96号、別冊2、2～7頁。

DOBASHI, Yoshimi (2023) *Penriuk et sa douleur : Ossements aïnous retenus prisonniers*, Presses de l'Université du Québec.

NUKISHIO, Kizô (2023) *Assimilation et vestiges des Aïnous : Manifeste précurseur autochtone*, Presses de l'Université du Québec.